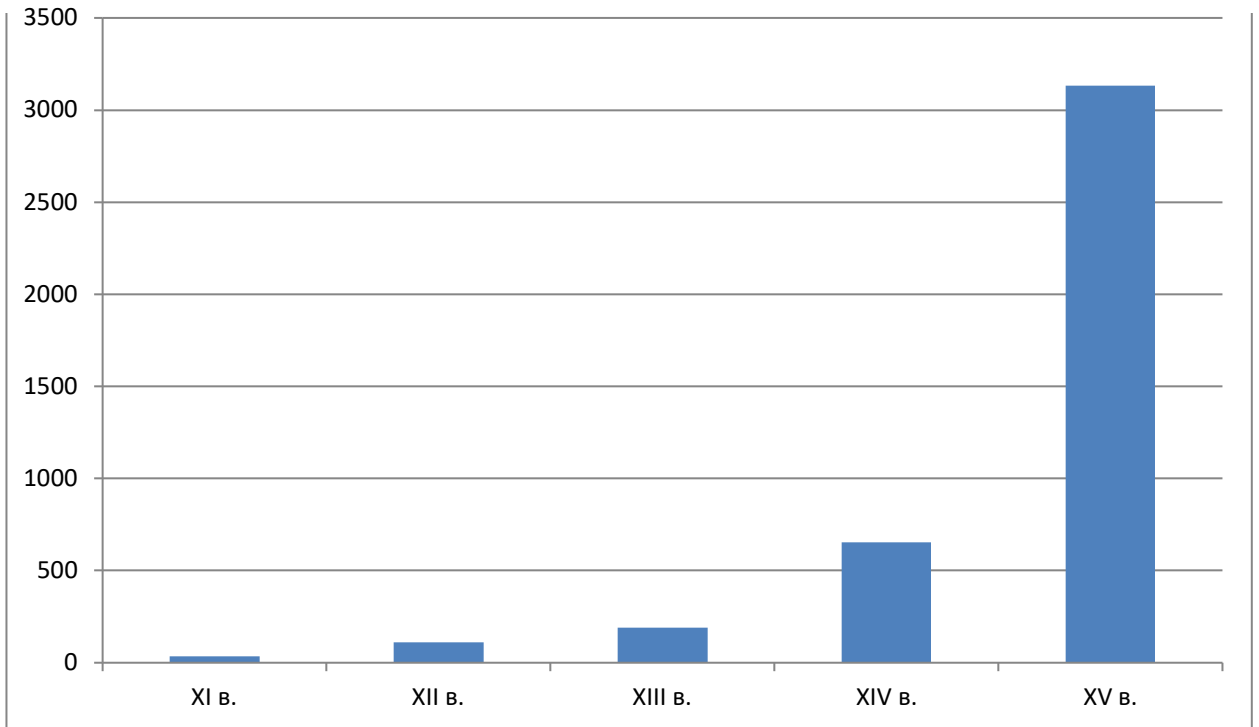


1. 15世紀の多声性

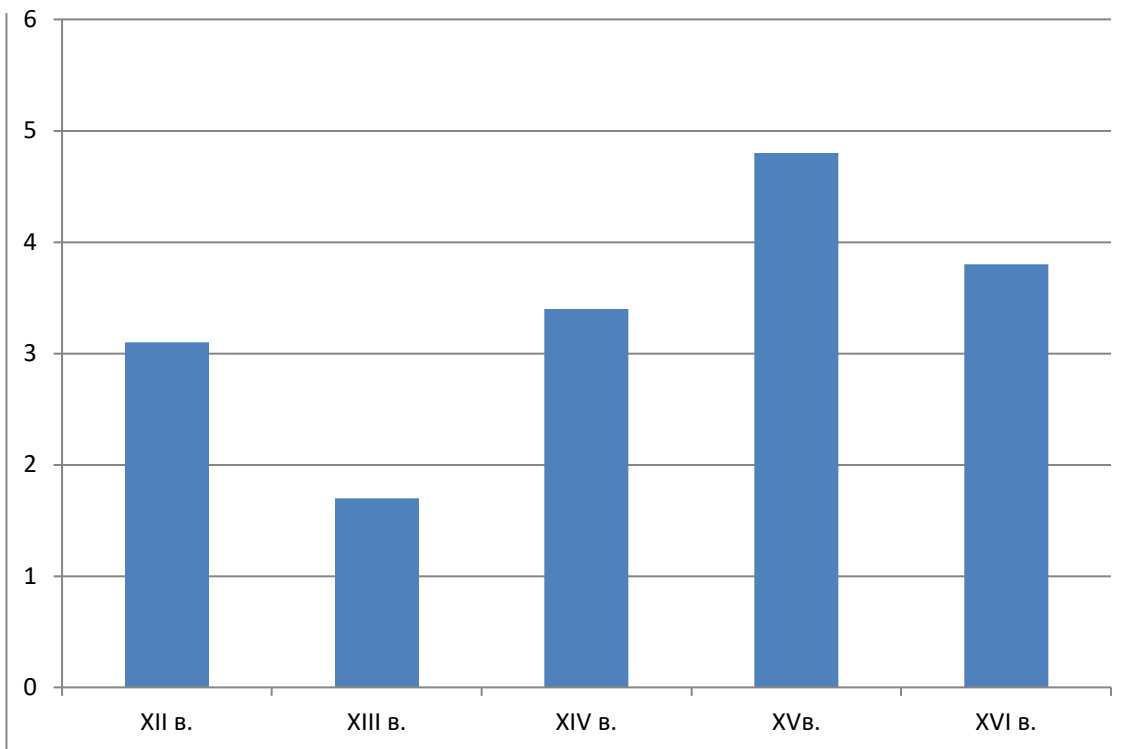
Я.С. ルリエは、自らの本『15世紀ルーシの2つの歴史』（サンクト・ペテルブルグ、1994年）のなかで、「15世紀は、ラドネジのセルギイを受け継ぎ、ワシーリイ2世やイワン3世によって統合された、理想的ルーシのイメージを確立できる時代だったのか否か」という問題にぶち当たった。ルリエは、初期の非公式な年代記の伝統に向き合いながら、15世紀を理想化された時代ととらえる通念は、作り上げられたものだという、かなり格下げした評価をした。しかしながら、史料の「多声性」そのもの、諸事件にたいする様々な視点の存在、神学から政治にいたる広範な諸問題にまつわる論争は、じつにこの時代に特徴的なものであった。「いまは、家でも、道端でも、市場でも、修道士たちも、世俗人たちも、みなが疑いを抱き、みなが信仰について尋ね歩いている」というヨシフ・ヴォロツキイの直接的な証言は、15世紀末のものである。

西欧の学問の伝統のなかで、グーテンベルグの活版印刷のあとにはじまる時代、すなわち、15世紀後半は、しばしば「第2次情報革命」の時代、「印刷革命」の時代と呼ばれる。「第2次情報革命」に特徴的なことは、活版印刷のほかに、紙が普及するのにもなって、書物という生産物の量がいちじるしく増加したこと、その結果、書物の性質が本質的に変化したことである。書物が世俗化して、情報を操作する、今日のマスメディアの原型ができあがったのである。

私たちの時代まで伝承されている写本による書物の分量が、15世紀はまえの時代と比べて、飛躍的に増えている。11世紀から14世紀にかけての伝存する写本の分量の変化を示すと、以下の通りになる。

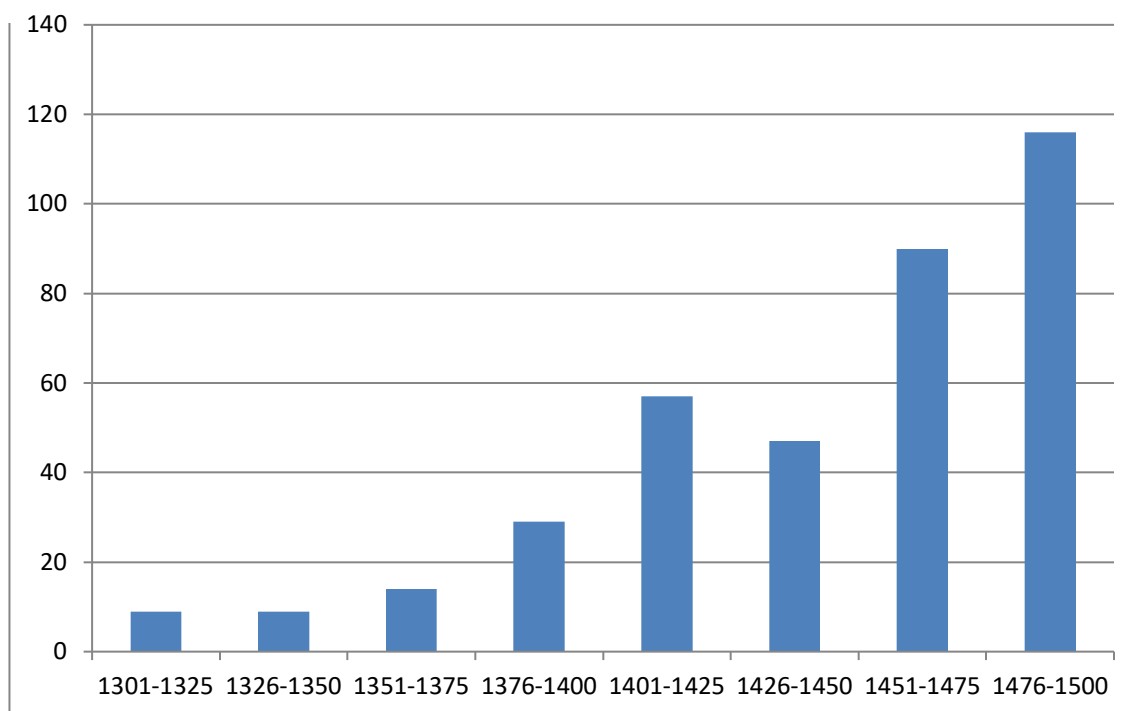


15 世紀以降の写本は、ルーシの場合、それ以前の 400 年に比べて、3 倍以上となる。15 世紀の場合、伝存する写本の量だけではなく、その増加のテンポもいっそう増すが、16 世紀になると、このテンポが低下する。



もしも、12世紀に由来する写本の量が11世紀のその3.1倍であったとすると、モンゴル・タタール勢力の襲来という悲劇的イベントがあった13世紀は、前世紀の1.7倍の増加に過ぎない。14世紀は、13世紀に比べて、3.4倍増加したが、15世紀は14世紀と比較して、写本の量の増加は4.8倍になっている。しかしながら、16世紀はふたたび増加のテンポが低下する。

14世紀と15世紀については、それぞれさらに四半世紀に分けてもっと詳細に分量の増加を見てみることにする。



すでに14世紀の最後の四半世紀、ラドネジのセルギイとエピファン・プレムドルイの時代に、中世ロシアの書物文化には、重大な結節点が訪れる。このことは、この時代に、社会と情報の根本的に新しい状況が生まれたことを証言している。それは、すなわち、修道院の図書館、蔵書と大規模な写本制作工房ができたことである。14世紀の最後の四半世紀と15世紀における、修道院図書館と写本制作工房の「革命的な」役割を理解するためには、それに先行する時代の状況を見る必要がある。

2. 共住式修道院と書物文化の関係

モンゴル襲来以前の、もっとも古いロシアの修道院の絶対多数は、クティトル（所有者）と呼ばれるパトロンをもつもので、公、あるいは、大貴族の「個人の帰属になる」ものだったが、中世ロシアで多くの修道院が書物のコレクションを所有しはじめるのは、書物も含め、財産を共有する共住制の修道院（キノヴィア）が現われてからである。書物の中心地となった修道院に特徴的なのは、それらが写本の制作、利用、保存の機能を集約していたことである。

モンゴルの侵攻以前には、こうした修道院は圧倒的少数で、わずかに 11 世紀半ばに建立された、共住式のキエフ洞窟修道院だけが特別な存在だった。公権力から独立していたこの修道院は、モンゴル侵攻以前の時代の最大の書物の中心地となった。洞窟修道院のフェオドーシイ、偉大なるニーコン、修道院長イオアン、ペレヤスラヴリのエフレム、ヤコフ、年代記作家ネストル、ノヴゴロドのニフォント、ギリシア人フェオドーシイ、『キエフ洞窟修道院聖者列伝』の作者であるシモンとポリカルプら、モンゴル侵攻以前の時代の中世ロシアの作家たちはみな、キエフ洞窟修道院の修道士たちだった。

ノヴゴロドの書物文化は、歴史的な要因が与かって、もっとたくさんの分量の写本が残された。ノヴゴロドにおいても、キエフ洞窟修道院の場合と同様に、ある共住式修道院の特別な役割を看取することができる。ノヴゴロドでもっとも古い修道院である、神の御母生誕アントーニイ修道院には、動乱（スムータ）時代（17 世紀）のあとも、44 の羊皮紙（ハラチャ）の写本が残っていた。12 世紀の前半にこのアントーニイ修道院で、有名な文筆家ノヴゴロド人キリクが働いていた。多くの研究者たちは、この文筆家が、ノヴゴロドの年代記制作を公権力の手から大主教のものへと移すという改革事業に参画したと考えている。キリクによって大主教による年代記制作がはじまった。

A.A. シャーフマトフは『ノヴゴロド第一年代記』旧版における 1136 年の項と 1137 年の項の記事に注目しているが、これらの記事と、ノヴゴロド人キリクが自らの著作『キリクによるすべての年数を数えるための教説』を書いた年代（1136 年）が一致している。さらに、暦の複雑な数え方が 1136 年の項の記事とキリクの著作で一致している。以上のことから、1136 年の政治的事件によって、ノヴゴロドは招聘された公と「契約（リャド）」を結ぶ独立共和国に生まれ変わり、その結果、『ソフィア年代記』が公の年代記（フセヴォロド集成）にとって代わって、年代記記述の仕組み全体が再検討されたと結論できる。キリクは、1136 年の政治的クーデターの結果、ノヴゴロドに招聘された公、スヴァトスラフ・オリゴヴィチが到着したことを記すさい、今までにない年代の数え方をしているが、このような正確で詳細な日付の確定を行なうことによって、キリクはノヴゴロドの生活において新しい時代が幕を開けたことを強調した。

年代記作成の黎明期に共住制修道院で制作された年代記は、反公権力の志向性をもっていったことを指摘しておきたい。

3. 第 2 次ビザンツ、南スラヴの影響

ロシアの修道士たちによって書き写された伝存する古い写本で、14 世紀の最後の四半世紀よりまえに遡るものは少ない。この 14 世紀の最後の四半世紀という時代はまさに、修道院の大規模な図書館、蔵書が現れた時代にあたる。ルーシにおける共住制修道院の広範な普及は、ラドネジのセルギイの修道が共住式の修道規則を採用したこと

と関係がある。まさにこの修道院の出身者が、14世紀後半から15世紀にかけて、何十という共住式修道院を創建した。

北東ルーシの修道院写本工房で制作された写本には、1410年を境に、「爆発的に」ある新しい諸特徴が現れる。それは、ルーシではそれまで知られていなかった、静寂主義（ヘシカズム）的傾向をもった著作を含む文集の出現である。それらの文集は、羊皮紙ではなく、紙のうえに、南スラヴ伝来の新しいタイプの筆跡の楷書体で書かれていた。それでは、1410年を境に一体どんなことが起こったのか。

書物文化における急激な変化は、新しい府主教としてギリシア人フォティオスがルーシにやって来た1410年4月22日という日付と密接に関連している。すでにルーシ来着の翌年、フォティオスは、劇的な婚姻を組織する。モスクワ大公ワシーリイ1世の娘、アンナを、ビザンツ皇帝の息子ヨハネスに嫁がせたのである。パレオロゴス時代には前例のない、パレオロゴス家とロシアの公家の婚姻は、紛れもなくフォティオスの偉大な功績にほかならない。1410年から看取されたビザンツとビザンツ歴代皇帝への関心の閃光のような高まりは、パレオロゴス王朝とリュウリック王朝が婚姻によって親戚となったことと関わりがあり、この交わりがいわゆる「ヘラス、ローマ年代記第2版」を生み出した。この作品には、「正教による統合」という思想が結晶化していたが、この思想のために尽力したのが府主教フォティオスにほかならない。

1410年代にビザンツとルーシが蜜月時代を過ごしたことは、ビザンツと第2次南スラヴの影響を強く受けるにさいして大きな刺激になった。三位一体修道院の輔祭ゾシマが回想しているように、ロシアの多くの教会関係者がコンスタンティノーブルに赴いたことも、また一方で、フォティオスとともにルーシに多くのギリシア人、南スラヴ人の文筆家がやって来たことも明らかである。

まさにこの時代、すなわち、1411年、1412年に、ノヴゴロドと全ルーシの年代記を総括する最初の試みが現れた。『ノヴゴロド、カラムジン年代記』の第一稿がそれだが、このときから、中世ロシアの写本において新しい諸特徴が「爆発的に」現われ、中世ロシア写本の形態も内容も変容した。このときに「カレンダーの上ではない」、本物の15世紀が到来したのだ。

4. 書物の中心地 — 三位一体セルギイ大修道院とリシツキイ修道院

14世紀終わりから15世紀にかけての北東ルーシの書物の中心地のなかで、もっとも重要なものが三位一体セルギイ修道院だった。この修道院から、14世紀終わりから15世紀にかけて、多くの文筆家たちが綺羅星のごとく輩出した。

北東ルーシの共住式修道院運動が三位一体セルギイ修道院に立脚していたとすると、ノヴゴロドの共住式修道院はアトスとの関係を保つことで成り立っていた。ノヴゴロド近郊、狐ヶ丘（リシヤ・ゴラ）にある、神の御母生誕中道院における書物文化の開

花は、14世紀終わりから15世紀の前半のことである。リシツキ修道院では、ほかのノヴゴロドの書物の中心と比べて、書記法、正書法において第2次南スラヴの諸特徴が早く現れた。リシツキ修道院の修道士たちとアトス山は連絡があった。14世紀の終わり、修道士アルセーニイと修道院長イラリオンは、聖山アトスへと「巡礼の旅」にでかけ、そこからいくつかの写本を持ち帰っている。

リシイ丘における写本活動を分析すると、14世紀終わりから15世紀はじめの時代に、この修道院がノヴゴロドの文化生活のなかで相当な役割を果たしていたことがわかる。半世紀ものあいだ、リシイ丘の修道院は、教会の高位聖職者を養成する、一種の「神学校」の役割を果たしていた。

5. 15世紀情報革命による書物文化の変化

本当の意味での「情報革命」は中世ロシアの書物文化でも、西欧の場合と同じように15世紀中葉（1450年頃）にはじまる。情報革命を特徴づけるものは、情報手段の広範な普及であるが、15世紀中葉から、現在までに保存されている写本の量が目立って多くなる。量的な変化は質的な変化を伴う。中世文学の図書館は、15世紀の中葉からはじまって、世俗的なフィクションのテキストによって補完されることになった。

たとえば、マケドニアのアレクサンドル大王や、天国の水を盗んだその娘のような主人公たちの伝説や、「自分の意志は何よりも勝る」と断言するケンタウロスのような神話的な人物などの話である。天国と境を接する国々にかんする物語（裸の賢者＝ラフマンたちについての物語）も広まった。ノヴゴロドの航海者によって発見された「地上の天国」にかんするワシーリイ・カレカの書簡（このテキストは15世紀中葉の『ソフィア第1年代記』にはじめて現れる）や外国の諸民族やその珍しい習慣についての物語（『インド王国についての物語』や『バビロンについての物語』）などもある。

外国の同時代の物語も芸術作品のテキストのなかでつかの間の反映を見出す。ネストル・イスカンデルの『1453年のコンスタンティノープル陥落の物語』がそれだ。また、フェオフィル・デデルキンは1456年12月4日のイタリアの地震について語り、破壊された街を50ほど数え上げている。この傾向は1470年代から1480年代にかけてピークを迎え、アフナーシイ・ニキーチンの『三海渡航記』（インド旅行の記録）、『東方の国における見知らぬ人間たちの物語』（ウラル山脈の向こうのサモディエツについての物語）、『ドラクラについての物語』（ワラキア公国のヴラド・ツェペシュについて）、そのほかの多数の旅行記が書かれた。中世ロシアの人間の世界は、インド洋の岸辺や北氷洋まで、つまり、人間が住みうる世界の果てまで、自らの境界を押し広げたかのようにであった。

そして、15世紀の終わりにキリル・ベロゼルスキ修道院で、新しい時代の到来までに作られたあらゆる本の目録のなかでもっとも詳細な目録、蔵書情報の構造化と索引づくりの成果である、文集の項目ごとの詳細記述を含む蔵書目録が成立した。

それと同時に、書物文化のなかに、フォークロアの「放浪する主題」から生きた日常的な言語の書きつけにいたるまでの、口承文芸起源のテキストがさかんに入りこんできた。キリル・ベロゼルスキ修道院の修道士であったエフロシンがとくに興味を抱いたのが、天国についてのアダムの嘆きをあつかった『飲み物を前にしての古き歌』、『酔酩についての講話』、真実と歪曲についての民衆詩を思い起こさせる『真実と嘘（不真実）についての講話』、呪われた場所（打ち捨てられた庭）についての怪談（ブリチカ）である『府主教キプリアンの奇跡についての物語』、よい女と悪い女についてのスカマロフの対話、民衆の謎々など、フォークロアのテーマと隣接した作品だった。エフロシン・ベロゼルスキは自らの文集に「フィクション」だけではなく、ときには非常にお下品な「笑いの（哄笑の）」テキストを収録した。

15世紀後半にキリル・ベロゼルスキ修道院で非公式な年代記の編纂が行われる。その編纂活動は、おそらくは、修道士たちの個人的イニシアチヴによるもので、修道院の注文によるものではなかった。これらの年代記のなかで、修道士たちは公式年代記ではありえない情報の交換をしている。たとえば、大公の不倶戴天の敵対者であったドミートリイ・ユーリエヴィチ・シェミヤカにかんする詳細な情報（大公ワシーリイ盲目公の命令によって、書記ステパン・ボロダトウイが、シェミヤカに盛るための毒をノヴゴロドにもたらした）、政治的敵対者の処刑への非難、軍司令官への批判、官吏の不公平への論難などがこうした非公式の年代記に盛りこまれた。

6. ロシア史上初の情報操作

15世紀のロシアの古文書、ことに非公式の年代記、社会評論においては、「真実（イスチナ）」、「真実（プラウダ）」、「公平さ」のテーマが特別な今日性を帯びてくる。イスチナはおもに人間にかかわる事象を意味し、プラウダは神にかかわる事象を意味している。イスチナの対極にあるのは、嘘（ロシュ）であり、迷いであり、思いつきであり、情報の歪曲である。このことを明晰に裏づけるのは、15世紀末の文集にあるテキストである。このテキストは、ノヴィコワの言う「文筆家X」、おそらくはヴァシアン・パトリケーエフによって筆写されている。この文集には、『真実についてのたとえ話』という作品がある。

「ある人が荒野をさまよっていたのだが、悲しげな様子で立っている、一人の女性を見かけた。この人はその女性に話しかけた。『おまえはいったい誰だね？』彼女は言った。『私はイスチナです。』その人は彼女に言った。『どのような原因があつて町を離れて、荒野に住んでいるのかね。』彼女は言った。『はじめのころは、嘘はまだ小さかったのです。しかし、いまはすべての人間に住みついています。』一嘘がイスチナ（真実）よりもよりよくなる時に、人間によって邪悪で狡猾な生活が営まれるという話である。」

通説によれば、中世ロシア文学においては、あからさまな着想、思いつきは許されていなかった。作者は意識的に嘘をつくことも、幻想を思い描くことも、自分の考え出した情報を盛り込むこともできなかった。作者は、自分の書いたことすべてをほん

とうのことだと信じていた。中世という時代において、「真実らしく見えること」は、年代からの逸脱を許さなかったし、考えつかれた名前や考えつかれた物語の場というものを許容しなかった。しかしながら、ここでさらに驚くべきことは、15世紀の写本テキストにおいて、紛れもなく故意の情報操作、というよりも、むしろ明らかなテキストの捏造と言えるもの（「嘘が真実よりもよりよい」）が見いだされるということである。

15世紀後半には、たんに情報の解釈だけではなく、情報の事実そのものが偏見をもった年代記作者たちの筆のもとで変容を蒙った。ノヴゴロド人たちが公の追放や招聘、条約の締結など、自らの権利を行使した場合でも、そうしたケースは公の恩寵という決り文句にすげ替えられ、次のような類の文言が付加された。すなわち、ノヴゴロド人たちはモスクワとの交渉に際して、あたかも「自らの罪、粗野、改善のなさ」のために跪拝叩頭したかのごとく書かれたのである。情報は政治のイデオロギ－的基礎づけのために権力に奉仕しはじめた。このことを表現力豊かに証言しているのは、『ソフィア第2年代記』の次のテキストである。

イワン3世は1471年のノヴゴロドへの遠征に際し、「自分の母親である大公妃に、彼女に勤務していた書記のステパン・ボロダトゥイを送るように頼んだ。ステパン・ボロダトゥイは、ルーシの年代記を解釈することができた。イワン3世が言うには、『もしもノヴゴロドに着いたら、ステパン・ボロダトゥイは自分に、ノヴゴロド人たちに、彼らの以前の裏切り（条約違反）について何と言ったらよいかを、思い出させてくれるだろう。ノヴゴロド人たちは、はるか昔にも、自分の父たち、祖父たち、曾祖父たちを裏切ってきたのだから。』」

ルリエが公平にも述べているとおり、モスクワとノヴゴロドとの平和条約が「古習」の不動の位置づけを宣言している以上、「古習」そのものを年代記において修正することが必要だった。

「情報革命」の時代に、歴史的先例の意義の重要性がいちじるしく増したために、モスクワの立場からのテキストの修正は、中世ノヴゴロドの主要な修道院の一つであるユーリエフ修道院で保存されてきた、ノヴゴロドの年代記にまで浸透した。ユーリエフ修道院は共住式修道院ではなかったにもかかわらず、この修道院には、さまざまな場所で注文に応じて制作された写本が集められている図書館、蔵書があり、そのなかにノヴゴロドの公式年代記の写本があった。修道士としての功業の一つとしての写本の筆写は、初期のユーリエフ修道院では広まっていなかった。

たしかに、ユーリエフ修道院の聖堂壁面に残された多数の落書きは、ユーリエフ修道院の修道士たちの識字率の高さを示しているものの、この修道院には、自前の写本工房もなかったし、修道院独自の年代記制作もおこなわれていなかったようである。ユーリエフ修道院で年代記の編纂が行われてきた痕跡は、もっと遅い時代、15世紀半ばになってようやくあらわれる。

シノド本の付け加えられた部分の一つは、教会による政治的検閲のよく知られた一例となっている。1332年の項に、イワン・カリターがトルジョクとベジェツキイ・ヴェルフを手に入れたという記事があるが、年代記作者はイワン・カリターがこれを「十字架接吻」によっておこなったと記した。『ノヴゴロド第1年代記』新版の諸写本でもそうですし、古い写本でもそう書かれている。もっとあとの時代になって、ある文筆家がシノド本におけるこの記事を変更して、この記事の代わりに別の色のインクと別の筆跡で、モスクワ寄りの見解をもつ別の定型句を書き入れた。すなわち、それは「ノヴゴロドの裏切りにより」という語句である。

シノド写本の書き込みに現れた情報は、ノヴゴロドとモスクワの文筆家が正反対の評価を引き出したことを示している。それには、「大公イワンはハーン国から帰ると、ノヴゴロドに怒りを発し、ザカマの銀を求めた」とある。1331年、イワン・カリターはハーン国で、大公位とその所領に加えてロストフ地方の半分を引き渡す裁定を勝ち取った。モスクワ公のおびただしい「贈り物」がこの決定を引き出すことになったわけだが、1332年、イワン・カリターはこの費用を「ザカマ地方の銀」で支払うことをノヴゴロドに要求した。この「ザカマ地方の銀」というのは、ノヴゴロドの北方の植民地であった、ハーン国から見てカマ川より向こうの地方から徴収される税のこと、この費用の要請は、モスクワとノヴゴロドの関係史のなかで初めて係争にまで発展した。

『ヴィチェゴツコ・ヴウムスカヤ年代記』は、つぎのように述べている。「1333年、大公イワン・ダニロヴィチは、ウスチューグ人とノヴゴロド人が、ヴィチェグダとペチョラからの租税をハーン国のツァーリに収めていないということで、ウスチューグ人とノヴゴロド人たちに怒りを発した。ノヴゴロド人たちは、ヴィチェグダとペチョラから徴収した租税を、そのとき、イワン公に差し出した。このときから、モスクワ公はペルミの人びとからも貢税を徴収しはじめた。」

このように、ここでは、ノヴゴロド人たちがかつて大公に支払っていなかった税金のことが述べられている。ということは、「裏切り」と言う言葉はここでは適切ではないということになる。新しい税の導入は、今まで行われてきた条約（「十字架接吻によって」）に違反して行われたとする、ノヴゴロドの年代記作者の正しさを認めなくてはならない。

7. 真実（プラウダ）と非真実（ニェプラウダ、嘘）

こうした改変は、無条件にモスクワ寄りの性格をもっており、ノヴゴロドのテキストとしてはきわめて例外的なものである。当初、研究者たちは、この改変を説明するにあたって、モスクワの「検閲」によるものであるとしてきた。しかしながら、ナソーノフはこの状況を次のように考えている。改変のうち最初のもの、1332年の項の改変は、同じ紙の裏側に書かれた1337年の項の記事執筆以前に行われていると指摘した。

つまり、モスクワ寄りの改変を行ったのは、事件と同じ時代に生きたノヴゴロド人であり、おそらくは、ユーリエフ修道院の修道士だった。

しかしながら、最近、アレクサンドル・セヴァリネフは、モスクワによるこの検閲はもっとあとの時代になって起こったものであるという考えに回帰するように提案した。彼は、年代記における改変を、イワン3世とノヴゴロドが対立した時代のものであると考えた。この研究者は、1470年代に年代記の紙の裏側に、テキストの改変に仮面をかぶせるために書き込みが捏造されたという仮説を述べている。セヴァリネフは、誰かが故意に古文書の内容を歪めて人びとを煙に巻くようなことをしたのだと考えている。15世紀の検閲人は、1世紀以上前の事件を記すにあたって、単に何かを改変しようとしたばかりではなく、それ以上に、このような事柄が、記載された事件の同時代人たちであるノヴゴロド人自身によって行われたのだと、見せかけようとしたのである。

ユーリエフ修道院が関係する同じような例がもう一つ知られている。それは14世紀の羊皮紙の文集に収められた聖者伝の執筆が、1130年であったかのごとく見せかける嘘の書き込みである。この写本におけるユーリエフ修道院での書き込みは、非常に巧みに古い筆跡を真似ているが、中世ロシアの、おそらくは15世紀の文筆家によって行われており、シノド写本におけるテキストの捏造とまったく同類のテキストの改竄と考えられる。

さらに、そのうえ、15世紀のどの時期に「モスクワ寄りの」文筆家たちが、シノド本が保管されていたユーリエフ修道院で年代記作成にあっていたかも、私たちはわかっている。1447年から1456年にかけて、ここにはドミートリイ・ユーリエヴィチ・シェミヤカ公の宮廷があり、その家族も住んでおり、「公と大主教」共同の年代記作成が行われていた。そればかりではなく、1450年代のはじめ、ドミートリイ・シェミヤカのもとに、年代記を知悉し「ノヴゴロドの裏切り」の専門家であった、あの大公の書記、年代記を「解釈する」ことができるステパン・ボロダトゥイが来ていたことを、私たちはたしかに知っている。

有名な文献学者のシャーフマトフは、この改変が、政治的情熱と世俗的利害が年代記作者の手を操縦した、14世紀における唯一の例であるとしているが、しかしながら、この改変は、年代記の情報の機能が変わり、それが権力闘争の一つの武器となった、もっと後代のものだと考えるべきであろう。その時代に、大公書記ステパン・ボロダトゥイという「モスクワの手」が年代記テキストを捏造したのだ。私たちの前にあるのは、ロシアの書物文化でほとんど最初の情報の歪曲、「真実（イスチナ）」を取り替える意識的な嘘の実例であると言えるだろう。

「プラウダ（真実）」と「真実（イスチナ）」についての観念は、法と神のまえでの公平性、さらにそれにたいする違反と結びついている。15世紀後半、キリル・ペロゼルスキイ修道院で、文筆家のエフロシンは『真実と嘘についての講話』という作品

を筆写（あるいは、創作）している。この作品のなかで、「嘘（不真実）」につながるすべてのもの拒絶するように呼びかけている。

「この人生にあるすべてのもの。甘く美しい富、名誉、権力、名声、食べ物、飲み物、衣服、召使い、所領、ぶどう園、壮麗な聖堂、あらゆる甘味。」エフロシンの別の写本では、同じような意味の数え上げがある。天国の傍に住んでいる敬虔なるラフマンには、「聖堂もなく、聖衣もなく、炎もなく、黄金もなく、銀もなく、酒もなく、肉食もなく、塩もなく、ツァーリもなく、買うこともなく、売ることもなく、争いもなく、戦いもなく、羨望もなく、危険もなく、窃盗もなく、強盗もなく、賭け事もない。」

ラフマンたちのユートピア世界では何がないのか。このキリル・ベロゼルスキイ修道院の修道士によって付け加えられた補足を総合してみると、ラフマンたちの国には、国家（ツァーリと貴顕）が、教会（聖堂と聖衣）が、犯罪（窃盗、強盗、賭け事）が、商工業（買い、売り、塩）が、人々のあいだでの争い（罵り合い、殴り合い、羨望）がない。これは、この時代にあっては大胆すぎるほどの社会のイメージであり、あきらかに、「嘘（不真実）」のないユートピア国家の修道的理想を反映している。

15世紀ロシアは、この理想からは程遠いものだった。アフナーシイ・ニキーチンはその作品『三海渡航記』において次のように書いている。「神がルーシをお守りくださいますように。神よ、ルーシを守り給え。主よ、ルーシを守り給え。この世には、ルーシに似た国はない。たとえ、ルーシの君主たちが不公平であったとしても。ルーシの国がうまくまとまりますように。そこで、公平がおこなわれますように。」作家のこの呼びかけは、中世ロシア書物文化の「黄金時代」から私たちのもとに届いたものだが、私たちの歴史のその後のすべての時代にとって切実なものでありつづけている。

これとパラレルだが、ルーシにおける「前ルネサンス」がルネサンスに発展することはなかったが、それを軌を一にして、15世紀後半の「情報革命」は、中央集権国家の公的なドクトリンの勝利をもって幕を閉じた。周知の通り、ヨシフ・ヴォロツキイの表現に拠るところの「無益な物語」は、16世紀の書物文化からは完全に駆逐された。「第二次情報革命」は敗北を喫しましたが、今日まで伝存された、中世ロシア書物文化の「黄金時代」の写本に鮮やかな痕跡を残した。

（了）

講演後、ボブロフ氏とコメンテータである山梨大学教授、皆川卓氏とのあいだで、活発な討論が行われた。その内容を以下に収録する。

【ボブロフ氏講演にたいする皆川卓氏のコメント】

ボブロフ先生には大変示唆的かつ刺激的なご報告に御礼申し上げます。中世ロシアの写本文化の発展と15世紀の重要な変化、権力による歴史の捏造と、「真実」の立場か

ら異議申し立てをする一部の聖職者の存在という、私のような日本の西洋史研究者には願っても得られない貴重な知見をお与え下さったことに、深く感謝する。

まず印象深いのは、中世後期、特に15世紀ロシアの修道院における写本の急速な拡大とコンテンツの広がりである。15世紀ヨーロッパの印刷本（インキュナブラ）が同時代の写本の1/10程度でしかなかったこと、しかもそのうちの70%がドイツとイタリアに偏っていた通り、15世紀はヨーロッパでも写本の時代だった。宗教改革後と異なり、まだ写本の影響力の方がずっと強かった。しかもヨーロッパ全体における15世紀の写本の総数は、14世紀のその1.8倍程度とされているから、ロシアの4.8倍がいかにも急速なテンポでの増加であったかが、その背景にある三位一体セルギエフ修道院にはじまる共住制修道院の役割が、いかに大きかったかが分かる。11世紀までの私有教会制を打破したクリュニー修道院改革が、修道士の学識を促し、リテラシーを高め、写本生産ブームを生んだ「12世紀ルネサンス」の過程がそこに重なって見える。

しかしここで問いが浮かぶ。西欧の「12世紀ルネサンス」は、ビザンツやアラビアの学知の影響を受けてはいるが、そのまま直ちに世俗的な関心を生んだわけではない。むしろ宗教的権威であるローマ教皇権の興隆と政争への関与、そして権威の失墜を経て、経験的世界への関心の回帰に至り、14世紀になって世俗世界への関心を年代記などの形で写本に残すようになった。それに比べると、「セルギイ修道院改革」とも呼べそうな14世紀以降のロシアの新しい修道制では、1世紀の間に物語や旅行記など世俗の知識を写本に書き留め、情報を交換するようになっている。そもそもこの世界の情報はどこから仕入れたのか。

クリュニー改革の頃の西欧は、外に対して閉じられた世界であり、聖職者と商人は敵対関係にあった。十字軍とイベリア征服、そしてそれに伴う地中海商業の長い過程が、少しずつ状況を変えていった。しかし14世紀から15世紀のルーシの修道制を取り巻く環境は、もっとオープンでダイナミックなものだったように思う。主教の赴任やアトス山の修道士たちとの交流による情報収集は、私のような素人でも想像できるが、例えば修道士と商人の情報交換はどうだったのか。ラドネジのセルギイはそれを禁止したのか。

またボブロフ先生の考察は、修道院写本の発展を具体的に詳述することで、地方の修道院の活力を示しているように思える。12世紀の記年法の変化にはじまったノヴゴロド周辺の諸修道院の写本文化、そしてラドネジのセルギイに始まる共住制修道院の広がりとともに起こり、キリル・ベロゼルスキ修道院の写本目録に至る写本の量的・質的发展は、モスクワを経由する新風に刺激されながらも、単なるビザンツの模倣に留まらず、地方の修道院の創造力によって生み出されたことを、丁寧で説得的な例証によって示しておられる。14世紀から15世紀のルーシの修道院が示した、キエフ・ルーシの時代にもないこの創造力は、一体どこから生まれたものなのか。

中近世のカトリックの修道制でも、喧噪を廃して自己と神の触れ合いを追求し、信仰上の確信を深める修行はよく見られる（カルトジオ会、アウグスティヌス会やカプ

チン会の瞑想など)。それとももっと古くからあるルーシの修道院の柔軟性と考えるべきなのか。

最後にもう一点重要な点に限って質問させていただきたい。この写本文化の終焉の理由について、ボブロフ先生は綿密な写本の考証から、そこに中央集権化の一つとしてモスクワが行った歴史の捏造を指摘している。すなわちツァーリの書記ステパン・ボロダトウイが写本の書き換え・改竄を通じて、ノヴゴロドを初めとする地方の従属を正当化し、それを「嘘」として批判し、共住制修道院の中で自らの知覚と学知によって神の「真実」を求めようとするヴァシアン・パトリケーエフらの姿勢を抑圧しようとする動きである。その論証は極めて説得的であり、それが現代に至るまでロシアの権力と良心の関係に重要な役割を果たしていることについても、何の異論もない。

あえて伺いたいのは、その中で「真実」の追求を主張した修道士たちは、なぜ敗北したか、ということである。「神の鞭」と自称するイヴァン 3 世、ヴァーシレイ 3 世、とりわけイヴァン 4 世の暴力が激しいものだったことは分かるが、それだけでは説明できない、この時代固有の理由があるような気がする。

16 世紀のヨーロッパを見渡したとき、私の専門である神聖ローマ帝国はそれにおよそ似ていない。修道士は宗教改革者であれ、カトリック修道士であれ、説教師となり、都市や村の至る所で神の「真実」を訴えた。活版印刷術が力になったことは確かだが、一般の俗人には説教の力の方がはるかに大きな影響力を発揮したように思う。皇帝に神の代理人として教会の統一を期待したのは、一部のカトリック聖職者くらいだった。結局単一宗教を表象する君主は現れず、神聖ローマは多宗派共存の国家連合のようになってしまい、人々は「民族」という新しい信仰対象を作り上げていく。

それに対して素人感覚だが、イヴァン 3 世以降のルーシと似ていると思うのが、実質的な世界帝国であったスペインである。いわゆる「レコンキスタ」が神話化した 16 世紀のスペイン王は、少なくとも中核部のカスティリャ貴族たちからカトリック護教のために戦う普遍君主「カトリック王」であるが故に、その地位を保つと見なされていた。同時代のスペイン王はそれを証明するために、中に向かっても外に向かっても、厳しいカトリック正統主義の強制、異端と異教の排除に邁進し、ヨーロッパ史を動乱に導いた。

ドイツのフランツ・ボスバッハ(Franz Bosbach)は、『普遍君主—近世の政治的主導概念』という 1997 年の研究で、宗教の世俗的最高権威となった君主が、その宗教のために極端な世界思想を担い、権力政治を増幅させていくメカニズムを明らかにしている。ビザンツの後継者として、正教の最高権威となったツァーリは、ロシアのエリートからどう見なされるようになり、どのように振る舞うようになったのか。

【皆川卓氏のコメントにたいするボブロフ氏の回答】

深く考えさせられるコメントに感謝したい。ご質問に次のようにお答えする。

1. 中世ロシアの文筆家たちが、どこから(世俗の)情報を得ていたのか？

15世紀後半、モスクワ大公国の下に中央集権化、国土統一が行われた。その際、多くの領土を所有する、また所有しない公たち、リューリック家やゲディミナス家、また彼らに仕えていた大貴族たちは、権力や皇帝の恩寵を失って強制的に、あるいは自主的に修道士になった。その際、世俗の領主の世襲領地は修道院の財産になった。

領土を所有する公の制度廃止によって、公から修道士となった者の数が目立って増えた。特に、共住式の三位一体セルギイ修道院とキリル・ベロゼルスキー修道院の修道士となった者が多くいた。『リボフ年代記』によれば、1484年、大修道院長パイーシイは、三位一体セルギイ修道院の修道士たちを「神の道」に派遣することができなかった。なぜなら「そこ（三位一体セルギイ修道院）には剃髪した大貴族、公がいて、修道院長パイーシイに従おうとしなかった」からである。

キリル・ベロゼルスキー修道院の状況も同じだった。修道院の書物文化の伝統に大きな貢献をしたのが、公から修道士になったヨアサフ（オボレンスキー）、エフロシン（シェミヤキンと推定される）、ヴァッシアン（パトリケーエフ）などである。

修道院に世俗の教育を受けた元公である修道士たちが現れたことで、修道院の書物文化は、歴史や地理、自然科学などの幅広い分野の著作を取り込むことになりました。つまり、中世ロシア文学が、かなり世俗的な性質を帯びることになった。公の書物の伝統が修道院の書物の伝統に流れ込み、新たな世俗的な内容をもたらした。

2. 修道僧たちは商人をどう思っていたか？ラドネジのセルギイは修道僧が商人と接点を持つことを禁じなかったのか？

修道僧たちは、理想論では、商品＝貨幣関係から遠いところにいた。だが現実には、農民とセットになった広大な所有地を管理・運営していたので、大なり小なり「世俗の」事柄を気にかけていた。倫理の視点からいうと、修道僧がなによりもまず非難・弾劾したのは商売ではなく金貸し業（高利貸）、今の言葉で言うと、銀行資本だった。聖書を根拠として、正教の修道士たちは、すべての高利貸業、すなわち、貸した金に利子をつけて返済させること、そのなかでも特に二重に利子をつける金貸しを強く非難した。西欧と違い、ロシアにおいては高利貸は抑圧や処分の対象にはならなかった。その反対に、商人の多くは、売り買いだけではなくて、高利貸業を営んでいた。

貸す相手は、他の商人や貴族だった。商人と公の結びつきは金融面に限られていたわけではない。商人は（商売がらみの）旅の中で、公から託された任務を果たしていた。それを裏付けているのが、15世紀後半に書かれたいくつかの旅行記、たとえば、『商人ワシーリイの聖地への巡礼』、および、本当に商人であったのかが疑問のアフナーシイ・ニキーチンの『三海渡航記』である。これら「旅行記」のもっとも古い

リストは、修道院図書館の蔵書であった選集の一部として現存している。修道僧たちが商人の活動・事業のこの側面に興味をもってことが文書として裏付けられている。

3. キエフ・ルーシにはなかった、14世紀から15世紀にかけてのロシアの共住制修道院のクリエイティブなパワーの源は何か？ロシアの修道士の伝統は、カトリックのそれとどこが違うのか？

ロシアの共住制修道院のクリエイティブなパワーの源は3つあった。

第1に、ビザンチンと南スラヴの文化遺産の消化吸収、習得が挙げられる。画家のフェオファン・グレク、作家のパホーミー・セルブなど、その道の匠の招聘なども積極的に行われた。いわゆる「第2次ビザンツおよび南スラヴの影響」（14世紀末から15世紀）、および、ロシアにおける前ルネサンス傾向は、主として修道院芸術の枠内で実現された。

第2に、修道院の蔵書が、世俗の、歴史、地理、自然科学など多岐にわたる著作で豊かになったことが挙げられる。世俗の公の書物の伝統が流れこんだことにより、修道院の本の伝統が新しい内容で充たされた。

第3に、民衆文化の影響が挙げられる。写本に口承の民衆創造性が、言語作品に民衆のしゃべり方や方言が、文学にロシア内外のフォークロアのプロットや登場人物が入りこんだ。

以上の3つのファクター（ビザンツと南スラヴ的伝統、世俗の公たちの伝統、フォークロア）が結びついたことで、15世紀の修道院文化の開花と、中世ロシアの書物文化の「黄金時代」が達成された。

この問いの後半部分は、ロシアの書籍における修道院の伝統と西欧のそれとの違いであるが、もっとも際立った違いといえるのは、東西キリスト教世界の笑いにたいする態度である。西欧の写本の細密画（ミニアチュール）、章頭飾り **headpiece**、頭文字、余白に描かれた絵には、中世のカーニバル・パワーを反映しているところの笑いのプロットやモチーフが溢れているが、ロシアでは、そうした事例は珍しい。分析の結果分かったのだが、中世ロシアの写本では非常にまれな、笑いのプロット、イメージ、モチーフがそれでも認められるケースは、往々にして西欧の影響を受けている。15世紀末のラジヴィル年代記のミニアチュールが好例である。中世ロシアの修道院文化それ自体は、完全にまじめなものだった。ドミトリー・セルゲーヴィッチ・リハチョフの言葉を借りると、西欧の文化は「大学の」そして「都市の」文化だったが、中世ロシアの文化は「図書館の」そして「修道院の」文化だった。もちろんこれは、将来の比較研究に大いなる場を提供するものだ。

4. 神の正義／真実／正しさを探し求めた修道士たちは、なぜ敗北したのか？

これは大変面白い質問である。そもそも共住制修道院の修道僧たちは、祝福、個人の告解と説教以外には、自分を取り巻く世界に対して直接で実際の影響を及ぼす手段をもたなかった。物的レベルにおける、精神的運動に対する国家の勝利は当然のものだった。だがこれは一時的勝利だった、なぜなら精神的価値は不朽で、何百年と経った後でも、社会の意識に影響を与え続けているからである。もっとも、彼らの同時代の政治の世界においても、「無所有派」が一時、政権を担っていた。次の質問への答えの中でこれに触れたい。

5. ロシアの政治エリートは、ビザンツ皇帝の統治権のある後継者となった、ロシアの大公や皇帝をどう見ていたのか？ロシアの政治エリートの要望を受けて、ロシアの皇帝はどのように行動するようになったのか？

1453年のコンスタンティノープルの陥落以後、ロシアの君主たちが新しい統治権(主権)観を持つようになったことで、政治エリートのあいだに「モスクワ第三ローマ説」という概念が生まれた。この概念は15世紀末に、スパソ・エレアザル修道院の修道士フィロフェイが、「二つのローマが陥落し、三つ目のローマはモスクワである」という言い方で、初めて打ち出したものである。

修道院の文筆家たちは、大公の権力に一定の期待をして、大公の権力にたいし、より高く厳しい要求をした。例えば、1462年の大斎期の時の、ワシーリイ2世盲目公が政敵たちを処刑した、流血の場面を描く際、キリル・ベロゼルスキ修道院の年代記作者は、「世界にただ一人の正教の偉大な皇帝にはふさわしくない」行いだ、とはっきりと書いている。

最高権力と政治エリートの関係を最もよく表しているのが、パトリケーエフ公一族の運命である。彼らは、リトアニアのゲディミナス家とつながりがあり、ルーシで、最高の地位を占めていた。15世紀末、イワン・ユーリエヴィチ・パトリケーエフは、事実上の首相であり、イワン三世に最も近い戦友だった。クレムリン宮殿の修理の際、大公は家族とともにパトリケーエフ家の屋敷に住んでいた。しかし、1499年、パトリケーエフ一族は皇帝の不興を買い、イワン・ユーリエヴィチは三位一体セルギイ修道院へと流刑され、そこで間もなく死ぬ。息子たちも弾圧された。1499年のパトリケーエフ一族の失寵の理由は、中世ロシアの文献にははっきりとは書かれていないが、研究者たちの推定では、1500年から1503年にかけての、リトアニア大公国との大規模戦争が迫った時期に、リトアニア寄りの平和主義的な立場を取り過ぎたからではないか、ということになっている。

私の仮説では、流刑先で、ヴァッシアンは、5冊以上の写本を書き写した。以前は、研究者たちは、これらの文集の執筆者を「文筆家X」としていたが、1501年ごろにこの執筆者が書き写した「リトアニアの諸公の系譜」というテキストには、次の一文が含まれている。

「ゲディミナスの息子ナリマンタス、ナリマンタスの息子パトリキアス、パトリキアスの息子ユーリイ、ユーリイ公の息子イオアン・ユーリエヴィチ公」

イオアン・ユーリエヴィチ・パトリケーエフの三番目の息子ワシーリイは、同じく1499年に強制的に剃髪され、キリル・ペロゼルスキ修道院に流刑されている。公から修道士となったワシーリー・イワノヴィチ・パトリケーエフ（修道士としての名前はヴァッシアン）は、まもなく、「無所有派」の主たる理論家兼評論家となる。このテキストに書かれた家系図で判断すれば、このワシーリイこそが、「リトアニアの諸公の系譜」の作者ということになる。神の真実を探し求める修道士たちのもとで修業をしながら、ヴァッシアンは1509年ごろ、ワシーリイ三世によって流刑地からモスクワに呼び戻され、その時点で「大公のおそば近くに仕える偉大なる時の人」となった。

まさにこの時期、イワン三世の死後、ヴァッシアン・パトリケーエフは、ツァーリの不興を買った修道士から、国で最も影響力ある人物であり、「無所有派」の中心的イデオログとなった。共住制修道院の修道士たちが権力を持っていた時代は、10年強だった。そのあいだに、プスコフやリャザン、スモレンスクがモスクワに併合され、教会の建設や年代記の制作が盛んになった。「ヴァッシアン派」は、ワシーリイ3世が皇妃ソロモニーダを無理矢理、修道院に入れ、再婚した1525年ごろ、つぶされてしまう。この行為を、教会の法規違反だと批判した、教会関係者たちは、厳しく処罰された。1531年、ヴァッシアンは異端の罪で、ヴォロコラムスクのヨシフ修道院へ流刑され、間もなくそこで亡くなった。ヴァッシアンは、中世ロシア書物文化の「黄金時代」を代表する最後の一人だった。

(了)

本講演は、科学研究費補助金(B)17H02406「中近世ヨーロッパにおける『正しい認識力』観念の変遷」による研究の一環として行われた。